



第47号（平成29年1月）



全国乾椎茸品評会団体優勝知事報告



生しいたけ品評会「大分森鮮力部門」入賞賞品



菌床キクラゲ栽培



大分しいたけ源兵衛塾

目次

●声

- ・大分の宝「乾しいたけ」を守り育てていくために
大分県農林水産研究指導センター
きのこグループ長 清原 誠二郎…………… 1

●研究報告

- ・試験研究課題の概要…………… 2
- ・原木乾シイタケの冬期発生技術に関する研究…………… 3

- ・短時間散水による
ほだ木育成技術の確立…………… 5

●トピックス

- ・受賞おめでとうございます！…………… 7

●人物紹介…………… 7



大分の宝「乾しいたけ」を守り育てていくために



大分県農林水産部
きのこグループ長 清原 誠二郎

平成28年4月の異動によりきのこグループ長を拝命しました清原です。よろしくお願いたします。

大分県産乾しいたけは、平成11年から市場価格が1kg2,500円台に下落するかつてない事態が発生しました。この時には「乾しいたけじゃ生活ができない。」「息子にしいたけ栽培はさせられない。」など、生産者からの悲痛な叫び声を聞きました。

この原因は、業者間での値下げ競争の結果、安価で輸入した中国産乾しいたけを「大分県産」として袋詰し販売する「産地偽装」が横行していたことから、県内の椎茸市場に出荷される県産乾しいたけを、適正な価格で仕入れる必要がなくなっていたことなどによるものでした。

県は、当時の林業振興課しいたけ特林係が中心となって、国に対しJAS法等の改正を強く要望したり、県外に県産商品の監視員を配置するとともに、袋詰業者等への立ち入り調査を行い産地偽装防止の指導を強力に行いました。さらには、乾しいたけの信頼を取り戻すために、大分県産であることを証明できる「大分乾しいたけトレーサビリティシステム」を構築しました。

私も、しいたけ特林係員として、毎晩遅くまで「鬼」になって、乾しいたけの適正流通に取り組みました。トレーサビリティシステムは、全国に事例がなく、専門家の指導を仰ぎながら、県椎茸農協や民間市場等の協力により、3年の歳月をかけ平成18年4月に稼働することができました。

これらの取り組みにより、県産乾しいたけ商品の取引が回復するなど「急性的な問題」がひとまず解決し、乾しいたけの価格は1kg4,000円を超えるまでになりました。

ところが、平成25年に再び市場価格が1kg2,500円を下回る事態となりました。原因は、福島第一原発事故以降の放射性物質等による風評被害とされていますが、県椎茸農協をはじめとする関係団体の積極的な取り組みによって、現在は価格を回復することができています。

しかし、乾しいたけ産業には依然として三つの「慢性的な問題」があると考えています。一つ目が、家庭消費量の減少、二つ目が、乾しいたけ生産者の高齢化、三つ目が、地球温暖化による気温上昇等を要因とする収量の減少や病害虫の発生です。

乾しいたけを取り巻く環境が悪化するなか、乾しいたけを守り育てていくため、県、市町村等の行政、県椎茸農協等の生産者団体、種菌メーカーと加工流通事業者等が連携を強化して振興策に取り組んでいくことが重要です。

第一の対策は、乾しいたけの需要量の維持・拡大です。乾しいたけ商品が、スーパーなど小売店の「定番商品コーナー」に並び続けることが大事です。乾しいたけの生産量は、大分県が全国の約半分を占めていることから、大分県が率先して

これに取り組む必要があります。

県及び県椎茸農協等が、今後、より効果的な需要拡大対策を講じていくためには、日々変化するマーケットを継続的に調査・分析し、新たな商品開発などマーケティング戦略を企画、実行していくことが重要です。

また、食育運動のさらなる強化、充実により、小中学校等の学校給食での活用を組織的に進めるとともに、対象を絞ったしいたけ消費拡大講習会開催など「乾しいたけの食文化の再興」に向けた取り組みも重要です。

第二の対策は、行政、関係団体や生産者が連携して、乾しいたけの安定生産に向けた積極的かつ集中的な事業活動を行うことです。

この事業活動の基本方向は、二つで、一つ目が、気候変動に対処した栽培方法を導入し単位収量の増大を図る。二つ目が、新たな生産者を確保するものです。

これからの乾しいたけ生産は、「雨乞い」をしながらいたけの発生を待つ栽培から、「水管理」を上手に進め、良いほだ木を作り、ほだ木からより多くのしいたけを絞り出す「攻めの栽培」へと転換していくことが重要と考えています。そのための散水技術や病害虫予防等の研究開発と技術の普及、散水施設や原木生産作業機械等整備の強化が必要です。「しいたけ栽培は、水にはじまって、水に終わる。」と言われていとおります。

さらには、「しいたけづくりは、人づくり」であることから、県や市町村等が新たな生産者を早期に見出し、育てるための説明会や研修会を開催するとともに、県椎茸農協等が、新規参加者に対し遊休の栽培施設や機械器具等の斡旋並びに原木やクヌギ林の紹介などの支援策も重要です。

このほど、きのこグループでは、前記の基本方向を柱とする『気候変動に対処した「乾しいたけ」安定生産のための活動方針』を関係団体の意見を参考にして作成しましたので、この活動方針を今後の普及指導活動や振興対策事業等に反映させ、乾しいたけの安定生産に向け取り組みをさらに強化してまいります。

結びに、大分県の乾しいたけは、大分県椎茸農協の発足から100年以上の歴史を有しておりますが、その長い歴史の中において、関係者の皆さんが知恵を出し、力を合わせて守り育ててきました。さらには、農山村の生活を支えてきた重要な作物であり、まさに「大分の宝」です。

きのこグループは、関係者の皆さんと力を合わせながら、大分の宝である乾しいたけをはじめとする「大分県のきのこ産業」を守り育てていくため、研究開発や普及活動に積極的に取り組む覚悟でありますので、これからも、きのこグループに多くの声を寄せてくださるようお願いいたします。

表紙写真の紹介

▼日本椎茸農業協同組合連合会主催の「第64回全国乾椎茸品評会」が開催され、大分県が団体（府県対抗）の部で18年連続、50回目の団体優勝を果たしました。▼生しいたけ品評会で大分の森鮮力部門が新設され、入賞した生しいたけ商品。▼県内に豊富にあるクヌギ資源を利用した菌床キクラゲ栽培。▼生産技術の向上、地域リーダーの養成のための「大分しいたけ源兵衛塾」

試験研究課題の概要

平成28年度の研究課題の概要を紹介します。

1. 乾シイタケ栽培における効率的発生操作技術の開発 (H26~H30)

気象変動の影響により春子の発生が不安定になりやすい乾シイタケ用低温性品種について、水分管理や保温処理などを組み合わせた管理により、単収向上を図る栽培技術の確立に向けた試験研究を行います。また、低温性品種の使用頻度が高い国東地域に実証試験地を設け、研究成果の生産現場への早期普及・定着を図ります。



2. 【新規】乾シイタケの味覚と機能性に関する研究 (H28~H30)

乾シイタケの旨味、香り、機能性成分を明らかにするために、品種、栽培地、品柄、乾燥方法等の異なるサンプルで、官能評価試験による味覚と旨味成分等の分析値を総合的に検討し、機能性成分量の差異を明らかにします。

3. 原木生シイタケ栽培における冬期の生産量向上技術に関する研究 (H26~H28)

生シイタケの需要期である冬期は、発生量が減少する傾向にあります。この時期の生産を安定させるために、連続浸水の手法について、品種の適合性や管理技術の栽培試験を行い、原木生シイタケ栽培における総合的な冬期発生技術の確立を図ります。

4. 菌床シイタケ栽培の省エネルギー制御技術の開発 —夏期の発生温度管理の検討— (H27~H29)

菌床シイタケ生産は、通年栽培が基本となっていますが、夏期は冷房コスト（電気料金）の上昇や品質の低下など経営環境が厳しくなります。このため、品質低下を招くことなく、夏期の冷房コストを削減するための発生温度条件を検討し、省エネルギー制御技術の確立を図ります。

5. 有用きこの類の品種改良 (H26~)

暖冬化や、本県の地域条件に適合したシイタケ品種の開発を行います。また、ナメコについては、生産現場の要望に基づき、新たな品種の育成を行います。なお、乾シイタケについては育種目標として、有用成分の含有量などを視野に入れて研究開発を進めていきます。

6. 【新規】地域資源を利用した新たなきこの栽培に関する研究 (H28~H30)

シイタケ生産者の施設で菌床アラゲキクラゲを栽培し、発生量や環境条件（温度、湿度、散水量等）を調査し、経営可能条件を明らかにします。



また、白アラゲキクラゲの安定性を確認します。また、セミタケ栽培に地域資源の利用を検討し、機能性成分の高い培地の開発を目指します。

7. きこの類栽培における害虫類の生態解明と防除技術の開発 (H26~H28)

原木シイタケの生産現場において、ほだ木を食害し、収量低下の要因となる害虫であるハラアカコブカミキリについて、農薬を使わない総合的な防除技術の確立を図ります。

8. 【新規】マーカー利用選抜による気候変動に適応した菌床栽培用シイタケ品種の開発 (国庫) (H28~H32)

選抜用マーカーを開発することで、効率的に従来品種より高温域で安定発生が見込まれる品種を開発します。

9. 【新規】高品質シイタケ安定生産に向けた天敵利用によるケミカルレスな害虫激減技術の開発 (国庫) (H28~H30)

ほだ木内のハラアカコブカミキリの幼虫を駆除するため、天敵微生物製剤の施用法等を検討し、幼虫駆除技術を開発します。

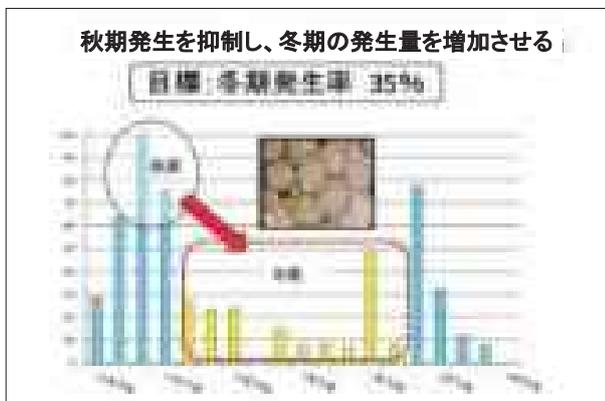
原木乾シイタケの冬期発生技術に関する研究 — 秋期ほだ木抑制効果の検証 —

1. はじめに

近年の暖冬現象により、本県で使用される乾シイタケ品種は、従来の低温性品種から、秋期と春期に分散発生する中低温性品種が多く使用されるようになってきました。しかし、中低温性品種は秋期に発生の最盛期を迎え、収穫された「秋子」は高温の影響から菌傘が薄く、菌柄が長いなど、市場での評価は低くなっています。また「春子」は採取時期が植菌作業と重なり、集中発生すると適期採取が困難になる年もあることが問題となっています。前課題では、冬期にビニールで保温処理を行うことで春期の発生を冬期に前倒しできる栽培技術を確認しました。

今回は中低温性品種の秋期の発生時期を、品質の良いシイタケが採取可能な冬期に遅らせることを目的（図-1）に、中低温性品種1年目のほだ木を用いて、秋期のほだ木の抑制とほだ起こし時期について試験を行いましたので報告します。

図-1



2. 秋期のほだ木抑制試験

(1) 試験の方法

森290品種を2013年6月26日に人工ほだ場に起こし、秋期に降雨抑制期間の異なる3つの試験区を設定しました。抑制期間が9月30日から11月26日までを2ヶ月区、10月25日から11月26日までを1ヶ月区、抑制を行わない区を対照区としました。

抑制操作は人工ほだ場内の雨よけテント（写真-1）により降雨を遮断して行いました。降雨抑制期間中の降水量は9月30日から10月25日の間が407mm、10月26日から11月26日の間が13mmでした。

抑制期間終了後は芽切り促進の散水を24時間行いました。また、前課題の成果より芽切り後の子実体成長に必要な温湿度を確保するために、12月～1月末までビニール被覆を行い、週2回から5回ビニールを開閉し、週1回1時間（20mm）の散水を行いました。

発生期間の10-11月を「秋期」、12-2月を「冬期」および3-4月を「春期」とし、合計発生量に対する各期間ごとの発生量を発生率としました。



写真-1 雨よけテントによる降雨遮断状況

(2) 試験の結果

発生率と合計発生量の調査結果を（表-1）に示しました。2ヶ月区は秋期発生率が13%、冬期発生率は61%で他区に比べて秋期の発生が抑制され、冬期の発生割合が高い傾向が見られました。また、合計発生量は1ヶ月区>2ヶ月区>対照区で1ヶ月区が最も多い結果となりました。

以上のことから森290品種は2ヶ月程度の秋期の抑制によって、秋期の発生を冬期に遅らせることが可能であることがわかりました。

表-1 発生率と合計発生量

試験区	期別発生率 (%)			合計発生量 (g/m)
	秋	冬	春	
対照区	32	44	23	9,568
1ヶ月区	28	42	30	11,840
2ヶ月区	13	61	27	10,769

3. ほだ起こし時期とビニール被覆の検討

(1) 試験方法

森ゆう次郎品種を用いて、ほだ起こし時期、ビニール被覆管理の異なる4つの試験区を設定しました。2015年10月27日のほだ起こし後、ビニール被覆を行う区（通ビニール区）と被覆しない区（通対照区）、11月25日のほだ起こし後、ビニール被覆を行う区（遅ビニール区）と被覆しない区（遅

対照区) としました。
 ビニール被覆は12月17日から3月3日まで行い、週に2回から5回開閉しました。また、ビニール被覆区は適宜散水(強度:20mm/時間)を実施しました。



写真-2 冬期のビニール被覆

(2) 試験の結果

①発生調査

発生率と合計発生量の調査結果を(表-2)に示しました。秋期発生率は、通ビニール区が21%で一番多く、他の試験区は14%-16%で差はありませんでした。冬期発生率は、遅ビニール区が44%、遅対照区が43%で、通常起こし区の29%、31%と比べて高い結果となりました。春期発生率については、通常起こし区が遅起こし区に比べて高い結果となりました。合計発生量は遅ビニール区が13,094g/m²で最も多い結果となりました。

以上のことから、森ゆう次郎は1ヶ月ほど起こしを遅らせることで、全体の発生量を確保でき、秋期の発生と春期の発生を抑制し、冬期の発生量を増加させることがわかりました。また、遅く起こした場合は冬期にビニール被覆することで、全体の発生量を増加させることがわかりました。

表-2 発生率と合計発生量

試験区	期別発生率 (%)			合計発生量 (g/m ²)
	秋	冬	春	
通ビニール区	21	31	48	10,478
通対照区	16	29	55	11,795
遅ビニール区	14	44	42	13,094
遅対照区	15	43	42	11,900

②選別調査

選別調査結果を(表-3)に示しました。

期別で比較すると、冬菇・香菇系の割合(以下、品柄割合という)、42mm(以下、中葉という)以上の発生量は、ほとんどの区で気温の低い冬期のほうが高い結果となりました。

試験区ごとに比較すると、秋期は、通常にほど起こした方が、ほど起こしを遅らせたものより冬菇・香菇系の品柄割合が高く、中葉以上発生量も多いことがわかりました。冬期は、遅くほど起こしを行う方が通常にほど起こしするよりも発生量、個数も多く、中葉以上の発生量も多いことが

わかりました。また、遅くほど起こした場合、冬期にビニール被覆管理した方が冬菇・香菇系の発生量が多くなることがわかりました。春期は遅くほど起こしの方が冬菇・香菇系の品柄割合が高く、中葉以上の発生量も多くなることがわかりました。以上のことから、森ゆう次郎は1ヶ月ほど起こしを遅延することにより、冬期の冬菇・香菇系の発生量、中葉以上の発生量が増加し、冬期にビニール被覆管理することで、さらに発生量が増加することがわかりました。

表-3 期別発生量と選別調査結果

試験区	品柄割合 (%)	1) 冬菇・香菇系(肉厚)系の発生状況			
		発生量 (g/m ²)	発生個数 (個/m ²)	42mm以上発生量(g/m ²)	
秋期	通ビニール区	14	295	95	173
	通対照区	15	286	7	120
	遅ビニール区	7	119	50	42
	遅対照区	7	119	50	42
冬期	通ビニール区	93	3,032	1,022	1,543
	通対照区	86	2,895	739	591
	遅ビニール区	88	5,152	1,452	2,053
	遅対照区	96	4,875	1,052	2,167
春期	通ビニール区	55	2,781	904	796
	通対照区	43	2,796	964	789
	遅ビニール区	57	3,117	1,037	1,002
	遅対照区	65	3,236	1,085	866

1) 冬菇・香菇系の発生割合



写真-3 冬期の発生状況

4. まとめ

今回の試験結果から、中低温性品種の森290は通常より早くほど起こしを行い、秋期に2ヶ月間水分抑制することで、秋期の発生量が減少し、冬期の発生割合が増加することがわかりました。また、森ゆう次郎はほど起こし時期を1ヶ月遅らせることで、秋期と春期の発生が減少し、冬期の発生が増加するという結果が得られ、遅く起こした場合は、冬期にビニール被覆管理することで全体の発生量も増加するという結果も得られました。

秋期の発生を抑制して冬期の発生を増加させるには、起こし時期、水分管理方法の検討と品種の選択が重要であると考えられます。

(主幹研究員 飯田 千恵美)

短時間散水によるほだ木育成技術の確立 — 移動式簡易散水施設の有効利用 —

1. はじめに

近年、シイタケ種菌接種時期である3～4月に少雨となることが多く、種菌の活着不良や菌糸伸長の遅れによってほだ化不良となり、発生量が減少する要因の一つとなっています。今までは、伏せ込み地である伐採跡地において、ほだ木に水分供給を行うことは困難であったため、自然降雨によるほだ木育成が主流でした。現在、軽トラック等に貯水タンクを積載し、水源のない場所でも散水が可能な移動式散水施設(写真1)の普及が進んでいます。これを用いれば少雨時に水分供給が可能ですが、貯水タンクの容量に制限があることから、散水時間は限られています。ほだ木づくりに対する短時間の散水の効果はほとんど研究されていなかったため、移動式散水施設の利用は子実体の成長散水が主でした。

きのごグループでは移動式散水施設を利用した、短時間散水によるほだ木育成について研究を行いました。今回は、短時間散水の効果的な方法や品種ごとの効果について、試験結果をもとに紹介します。



写真1. 移動式散水施設

2. 短時間散水の方法

(1) 短時間散水の時間

短時間散水の時間は、スプリンクラー(散水直径10m、散水量2.2リットル/分)10基、貯水タンク500リットルを用いて散水可能な20分間/回としました。

(2) 短時間散水の回数(試験1)

効果的な散水回数を明らかにするため、仮伏せしたほだ木の自然降雨を遮断し、散水を週1回行う試験区、週2回行う試験区、行わない試験区を設定し、種駒接種年の12月中旬の菌糸蔓延率を調べました。短時間散水は2014年3月3日～2014年4月4

日に行い、散水処理後は自然管理でほだ木を管理しました。試験の概要を表1、調査結果を表2に示しました。

表1. 試験1、2の概要

接種品種	森290木片種駒を1本当たり20駒接種
種菌接種日	2014年3月3日
散水器具	散水チューブ(エバーフローM型、散水量0.5ℓ/m/分)
ほだ木本数	各試験区5本ずつ
仮伏せ条件	コンクリートブロック上に棒積みし、遮光ネットで被覆した。
本伏せ条件	2015年6月2日にクヌギ林林縁部に鳥居伏せ

表2. 散水回数が菌糸蔓延率に及ぼす影響

*表の数値は平均値±標準偏差を示す

試験区	材表面菌糸蔓延率 (%)	木口菌糸蔓延率 (%)
週1回散水区	85 ± 18	63 ± 18
週2回散水区	86 ± 6	67 ± 21
無散水区	75 ± 17	59 ± 24

散水を行った試験区は、散水を行わない試験区より菌糸蔓延率が約10%高くなりました。また、週1回散水区と週2回散水区の蔓延率の差は小さく、散水を行う労力を考慮すると散水回数は週1回で効果が得られると考えられました。

(3) 短時間散水の時期(試験2)

効果的な散水時期を明らかにするため、表3の試験区を設定し、種駒接種年の8月上旬の菌糸伸長面積を調べました。散水と降雨遮断は3月散水区は2014年3月3日～2014年4月4日、4月散水区は2014年4月16日～2014年5月16日に行いました。試験の概要を表1、調査結果を表4に示しました。

表3. 散水時期の試験区の概要

試験区	散水	3月降雨	4月降雨
3月散水区	週1回	遮断	あり
3月無散水区	なし	遮断	あり
4月散水区	週1回	あり	遮断
4月無散水区	なし	あり	遮断

表4. 散水時期が菌糸伸長面積に及ぼす影響

試験区	材表面菌糸伸長面積 (cm ²)	材内部菌糸伸長面積 (cm ²)
3月散水区	16.6 ± 4.8	10.9 ± 11.0
3月無散水区	19.0 ± 8.0	17.6 ± 7.2
4月散水区	21.1 ± 9.6	11.7 ± 9.4
4月無散水区	6.8 ± 3.3	5.5 ± 6.2

*表の数値は平均値±標準偏差を示す

4月無散水区の菌糸伸長面積が他の試験区と比較して小さいことから、4月にほだ木へ水分供給がないと、菌糸伸長に負の影響を及ぼすことがわかりました(写真2,3)。このことから、4月に散水を行うことが、菌糸伸長に効果的であると考えられました。



写真2. 材表面菌糸伸長状況
(上: 4月散水区、下: 4月無散水区)



写真3. 材内部菌糸伸長状況
(左: 4月散水区、右: 4月無散水区)

3. 短時間散水の品種ごとの効果

前述の試験は森290を用いて試験を行いました。他の品種でも同様の効果が得られるか確認する必要があります。そこで、短時間散水の他品種への効果を確認する試験を行いました。(試験3)

使用した品種は森290、森121、森新908、菌興115、菌興327、セッコーとよくにの6品種を用いました。試験は自然降雨を遮断した仮伏せ中のほだ木に、週1回散水を行う試験区と散水を行わない試験区を設定し、種駒接種年の12月中旬の菌糸蔓延率を調査しました。散水と降雨遮断は2015年4月1日～2015年5月1日に行いました。試験の概要を表5、結果を表6に示しました。

散水の効果が確認できた品種は森121、菌興327、セッコーとよくにの3品種でした。森290と菌興115は今回の調査では効果が確認できませんでした。しかし、別の試験において8月上旬の菌糸伸長調査

を行ったところ、まん延率が高かったことから、早期の菌糸伸長には効果があると考えられました。森新908は効果が確認できませんでした。

試験結果から短時間散水によるほだ木づくりは、効果が小さい品種もありましたが、多くの品種で効果があると考えられました

表5. 試験3の概要

種菌接種日: 2015年2月19, 20日
散水器具: 散水チューブ(エバーフローM型、散水量0.5ℓ/m/分)
ほだ木本数: 各試験区5本ずつ
仮伏せ条件: コンクリートブロック上に棒積みし、遮光ネットで被覆した。
本伏せ条件: 2015年6月2日にクスギ林林縁部に鳥居伏せ

表6. 短時間散水が品種に及ぼす影響

品種	試験区	材表面菌糸蔓延率 (%)	木口菌糸蔓延率 (%)
森290	散水区	64 ± 16	38 ± 15
	無散水区	66 ± 16	30 ± 11
森121	散水区	55 ± 24	38 ± 18
	無散水区	30 ± 6	23 ± 8
森新908	散水区	60 ± 21	40 ± 15
	無散水区	67 ± 13	50 ± 23
菌興115	散水区	58 ± 24	38 ± 23
	無散水区	60 ± 15	41 ± 19
菌興327	散水区	57 ± 9	25 ± 12
	無散水区	27 ± 17	24 ± 16
セッコー	散水区	58 ± 28	33 ± 19
とよくに	無散水区	48 ± 22	30 ± 20

*表の数値は平均値±標準偏差を示す

4. まとめ

試験結果から、短時間散水はほだ化不良を回避するのに効果的であることがわかりました。詳細は省略しますが、本伏せ中のほだ木や散水器具としてスプリンクラーを用いた試験も行っており、どちらもほだ木づくりに効果があることを確認しています。また、4月までであれば散水を行う時間帯は、朝でも夕方でも結果は変わらないことも確認しています。

4月が少雨になり、散水できる環境がある場合は、1週間に1回、20分の散水によって、良質なほだ木づくりを行うようにお願いします。

(研究員 川口 真司)

受賞おめでとうございます!

小野 九洲男 氏 (豊後大野市)
旭日単光章

平成28年秋の勲章において、永年の全国的な栽培技術の普及と乾椎茸産業振興への貢献から、個人の農林業家では大変珍しい旭日単光章を受章された(大分県の椎茸生産者では初)。特に全国品評会での17回の農林水産大臣賞受賞や、「椎茸の神様」と呼ばれ、乾椎茸がマスメディア等に注目される機会が増えたことが評価された。



小野さんご夫妻

小野 祝保 氏 (豊後大野市)
黄綬褒章

平成28年秋の褒章において、暖冬傾向期に安定した発生操作技術による生産量の確保や品質の向上による卓越した技術でその技術普及等永年の功績が認められ、黄綬褒章を受章されました。昭和62年以降、全国乾椎茸品評会等において数多く上位入賞するなど大分県の乾しいたけ生産振興に貢献したことが高く評価されました。



小野さんご夫妻

清原 米蔵 氏 (国東市)
緑白綬有功賞・森喜作賞

永年にわたる優良経営及び椎茸栽培技術・経営の普及における功績が評価され、平成27年度の森喜作賞を受賞されました。

氏は、ほだ場の改善や省力化により生産の安定に努める中、規模拡大を図っています。また、各種研修会で講師を務め、後継者の育成に力を注いできたことと共に世界農業遺産地域のモデル農家として国内外への情報発信の役割を果たしていることが評価されました。



清原さんご夫妻

グループ長
清原 誠二郎 国東市

森との共生推進室森林環境保護班からきのこグループ長として異動。平成15年からしいたけ特林係で乾しいたけの産地偽装防止等の流通対策を担当するとともに、大分乾しいたけトレーサビリティシステムの構築に尽力した。その後、北部振興局では、普及員として、椎茸栽培研究会の立ち上げや椎茸原木供給事業の実施等に取り組んだ。きのこに例えると、今年県内で猛威を振るった「オオボタンタケ(ヒポクレア・ペルタータ)」か?



企画指導担当・主幹・広域普及指導員
山下 和久 大分市出身

当グループには平成16年から6年間在籍し、その後西部・中部地区でしいたけ普及員として活躍し、今回、中部振興局から6年ぶりの復帰となった。中部振興局では、真空容器を利用した乾しいたけの5分戻しを考案し、そのとき購入した大量の真空容器の使用方に頭を悩ませている。前回命名された「バイリンガー」を今回も引き継ぐ。



きのこチーム・研究員
市野瀬 桐香 福岡県春日市出身

当グループ24年ぶりの新採用職員。大学では砂防を専攻。しいたけの消費国である香港への留学経験もあり、これからが大いに期待できる大型新人。原木乾しいたけの栽培技術に関する研究、きのこ類の遺伝子収集及び保存を担当している。趣味はポケモンGOで、休日にはポケモンを探し、三重町のポケストップに出現している。持ち前の明るい笑い声で職場の雰囲気を和ませてくれる。きのこに例えると、「タマゴタケ」か?



平成28年度「差別をなくす人権標語」優秀作品

かんが つか おも
「**考えて**される**辛さ**と**する**重**さ**」
すがわら ふみか
大分上野丘高等学校 1年 菅原 史夏



大分県人権啓発イメージキャラクター
ころちゃん

編集・発行

大分県農林水産研究指導センター林業研究部きのこグループ

〒879-7111 大分県豊後大野市三重町赤嶺2369
TEL 0974(22)4236 FAX 0974(22)6850

印刷

株式会社インタープリント